

考古学発祥の地・大森貝塚など散策資料

2017.9.6(水)

集合場所 JR 大森駅ホーム 考古学発祥の地→文士村のレリーフ→大森貝塚の碑
→大森貝塚遺跡公園→鹿島神社→品川歴史館→来迎院供養塔群→大井の水神→
光福寺→西光寺→作守稻荷→三つ又地藏尊→東急大井町駅解散

大森駅 大森駅のホームに「日本考古学発祥の地」という石碑が建っています。
側面には E・S モース発掘 100 周年記念建立とあり、上に深鉢式土器の
模型が載せられています。



日本考古学発祥の地

(八景)天祖神社

享保年間(1716～1735)当地の庄屋、年寄、百姓らが伊勢講を組織し、皇大神宮で霊を受け祭祀したのが創建といわれています。危険なほど急こう配の参道の脇に八景の碑があります。「鎌倉のより 明るし のちの月 景山」と読めます。裏に八景が書かれています。

笠島夜雨、鮫州落雁、大森落雪、袖浦秋月、羽田帰帆、六郷夕照、大井落雁、池上晚鐘

文士村のレリーフ

大森駅の山王口を出たら横断歩道を渡り天祖神社の急な階段わきの崖に文士村の住民たちのレリーフ(43人の群像)が設置されています。石坂洋次郎、宇野千代、尾崎士郎、川端康成、川端龍子、北原白秋、小島政二郎、佐藤惣之助……など。レリーフは群像の他に、マージャンをする人々、ダンスパーティ、相撲をする人々などの作品があります。



レリーフのある坂道



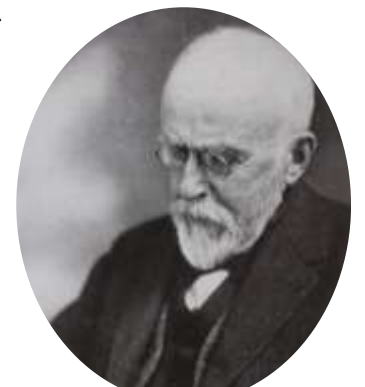
文士村のレリーフ

大森貝塚

明治 10 年(1877)横浜に上陸したアメリカ人のエドワード・S・モースが、6月 19 日横浜から新橋へ向かう途中、大森を過ぎてからすぐの崖に、貝殻が積み重なっているのを列車の窓から発見し、政府の許可を得て発掘調査を行いました。助手3人と土器、骨器、獣骨を発見しました。貝塚の遺跡は国の重要文化財に指定されています。

*なぜ二つの石碑があるのか

大森貝塚の石碑は、品川区の大森貝塚公園と、大田区側の大森駅近く NTT データ大森山王ビル横の小道を下った所の線路側に建っています。前者は横書きで右から「塚貝大森」、後者は縦書きで「大森貝塚」と書かれています。なぜ離れた場所に



モース博士

何故二つの貝塚の石碑があるのか？ それはモース氏が論文で発掘場所を詳細に書かず、所在地を大森と記述したことによります。このため長い間、品川説と大森説の二つが存在しました。その後、昭和 59 年(1984)の調査により、東京府が大井村鹿谷(現在の大井6丁目)の土地所有者に、調査の補償金 50 円を支払った文書があることと貝塚碑周辺の再発掘で貝層が確認された一方、大森側では見つからなかったことなどから、現在ではモースが調査したのは、品川区側であることが分かりました。なお二つの石碑は約 300m 離れています。



大田区大森側の貝塚碑



品川区大井側の貝塚碑

鹿島神社

大井村の総鎮守で、安和元年2年(969)に常陸国(茨城県)の鹿島神社を勧請して創建されました。本殿は昭和6年(1931)に建てられた総檜造り。文久2年(1882)の旧本殿は、四尺約 1.2m 四方の小さなものですが、覆屋をかけて保存されています。境内に大きな樹木が繁茂しています。中でも2本のタブノキと旧本殿の後ろにあるアカガシは推定樹齢 150 年を超える老木です。このほか江戸時代後期の俳人で、大井村の名主であった大野景山の句碑「炉の友の巡り逢いたるさくらかな」や、江戸時代から明治の初めにかけて、この地域の農業用水供給に大きな役目を果たした品川用水を記念する「恵澤潤沢治碑(けいたくじゅんこうのひ)」があります。



鹿島神社

品川用水

品川における江戸時代の農業は、自然に恵まれず、天水や湧き水に頼るしかなく、旱魃に苦しむことが多かった。そのため村々は幕府に対して灌漑用水の開削について嘆願を長い間続けてきました。寛文7年(1667)になって幕府から工事の許可があり、工事は玉川用水を水源とした千川用水から分水する方法で行われました。

水争い

品川用水の開通により天水と湧き水に頼っていた田畑に、大きな恵みをもたらしました。しかし自分たちの村に正常に品川用水が流れてくるかどうかは、農作物の収穫高に影響するので死活問題でした。それだけに水利権の問題は大きく、盗水や水路破壊などの事件が発生しました。

元禄 10 年(1697)品川用水上流の上仙川での、堰を作り用水を使っての水車使用の争い、文政3年(1820)上中仙川村との水争いなど、用水をめぐる水争いが続きました。品川用水は暗渠になり、見ることはできません。



恵澤潤沢治碑

品川歴史館

1階は東海道第一の宿場として栄えた品川宿の町並みの再現など、品川の歴史がよく分かります。2階は日本考古学の発祥の地、史跡・大森貝塚と、その発見者・モース博士についての資料が展示されています。入館料は100円ですが、70歳以上は無料です。



品川歴史館

来迎院石造念仏供養塔

来迎院の向かいに道路を隔てて3つの小堂が並んでいます。右側の堂内に2基、その左側に1基の念仏供養塔があります。もとは来迎院の境内でしたが、道路建設のため分断されました。明暦2年から寛文7年に大井村の人々によって建てられました。他の二つの堂内には庚申供養塔と不動明王像、石灯籠が置かれています。



来迎院の石造念仏供養

大井の水神

江戸時代の初期、貞享2年(1685)、大井の人々が農業用水の潤沢を願って石の祠を寄進しました。祠の前に池があり、ここに湧き水が流れていました。しかし昭和50年代の都市化により湧き水は止まり、いまではポンプで地下水をくみ上げています。

大井の水神様とその前の池(金網で囲っている)社の前に柳樹があったことから「柳の清水」とよばれています



大井の水神様



水神様の前にある池(金網で囲っている)

光福寺のイチヨウ

本堂の手前左側にあり、推定樹齢800年、幹の周囲約6m、樹高30m、品川区内で最も古いといわれています。

西光寺

創建は鎌倉時代の弘安9年とされ、当時は天台宗でした。江戸時代の初期に浄土真宗になりました。江戸時代には桜の名所として知られ、多くの桜の木がありましたが、明治26年の火災で本堂などを焼失し、桜の木もほとんど枯れてしまいました。現在、その名残の「児桜(ちごさくら)」が見られます。



児桜(ちごさくら)



光福寺のイチヨウ(左奥)

西光寺石造供養塔

墓地の入口に3基の供養塔があります。いずれも江戸初期の(1655～73年)に建てられたもので、阿弥陀如来像を刻んだ念仏供養塔と庚申供養塔、地藏菩薩像があります。



西光寺の石造り供養塔



作守稲荷社

作守稲荷社

この稲荷社はこの地にあった薩摩藩の屋敷地内に祀られていました。社殿前の水盤に文政四辛巳年(1821)と刻んでいることから、その頃すでに祀られていたものと思われます。

三つ又地藏

天平(729～748)から正歴(990～994)には、このあたりに十一面観音を祀った観音堂があったと伝えられています。その堂が戦乱により焼失したあとに、大井庚申塔から出土した地藏像を祀ったといわれます。現在の地藏堂は、第二次世界大戦後に再建されたもので、病魔、安産のなどの「身代わり地藏」として人々の信仰をあつめています。戦前は毎月14日と晦日に縁日が開かれ、賑わったといわれています。



三つ又地藏

大森海岸の海苔(のり)

大森海岸の海苔は、江戸時代に御膳海苔として将軍様に上納されるほど品質に優れ、後にその生産技術は全国にひろがりました。大森は日本の海苔生産の中心的な役割を果たしてきました。昭和34年の埋め立て工事により、大森の海苔養殖の歴史は閉じられましたが、今も多くの海苔問屋が集まり、全国に販売される海苔の要となっています。

海苔生産の割合	佐賀県	有明	22%
	兵庫県	瀬戸内海	18%
	福岡県	有明	14%
	熊本県		11%
	宮城県		8%



参考文献

しながわの史跡めぐり 品川区教育委員会
品川歴史館資料 品川歴史館
私たちのモーヌ 大田区立郷土博物館
海苔物語 大田区立郷土博物館
海苔の作業場風景

